大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

2016 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2018-04-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 金田, 忠裕, 井上, 千鶴子, 土井, 智晴
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007519

2016 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告

金田忠裕*，井上千鶴子**，土井智晴*

A Report on the Workshop of Academic Portfolio in 2016

Tadahiro KANEDA *, Chizuko INOUE **and Tomoharu DOI *

要旨

大阪府立大学工業高等専門学校ティーチング・ポートフォリオ(TP)研究会では，教育改善の一環として TP 作成ワークショップ（TPWS）並びに TP 作成者を対象とした,アカデミック･ポートフォリオ（AP）作成 WS を同時に開催している.本稿では，中教審答申における TP 並びに AP の位置づけを説明し、2016 年度に実施したアカデミック・ポートフォリオ作成 WS の概要を説明した後，ワークショップ参加者の感想と考察を報告する.

キーワード: アカデミック・ポートフォリオ，教育改善，統合

１．はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校（以下，本校と略す）ティーチング・ポートフォリオ（以下，TP と略す）研究会は教育改善の一環として 2009 年より TP の作成に取り組んでいる[1]．これに対してアカデミック・ポートフォリオ（以下，AP と略す）とは，「教育，研究，サービス活動（社会貢献・管理運営等）の業績についての自己省察による記述部分およびその記述を裏付ける根拠資料の集合体であり，教員の最も重要な成果に関する情報をまとめた記録」である[2].

2012 年 1 月 4～6 日に大学評価・学位授与機構小平本部で AP 作成ワークショップが開催された. このときの手法を踏襲して，TP 研究会では 2012 年度以降から連続して本校で AP 作成ワークショップを開催してきた[3～6].

2016 年度に本校で第 10 回及び第 11 回の AP 作成ワークショップ（以下，WS と略す）を開催した．本稿では，その実践並びに考察を報告する.

2017 年 8 月 21 日 受理

＊ 総合工学システム学科 メカトロニクスコース
(Dept. of Technological Systems : Mechatronics Course)
** 一般科目 (General Education)

２．アカデミック・ポートフォリオについて[2]

本校で実施している APWS は事前に TP を書いた人を対象に 3 日間で AP を完成させる WS である．AP の最大の特徴は，教育・研究・サービス活動，互いの連携・寄与について考察する「統合」の章にある．また，これまでの成果から最も自分が誇りに思うものを 3 つあげて記すこと も AP の大きな特徴である（これは，教育 1 つ，研究 1 つ，サービス活動 1 つと決まっているわけではなく，教育を重要視する教員ならば教育から 3 つ選ぶ等，教員の活動スタイルにあわせることができる）．さらに，将来達成したい目標を 3 つ記す点も単純な「業績リスト」と大きく異なる点である．これらを十分な自己省察を行いながら記述していく[2].

中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」43 ページには次のように記載されている.

> ◆教員の人事・採用に当たっての業績評価について，研究面に偏することなく，教育面を一層重視する.
> 大学として，自学の教員に求める役割・責務，専門性等を学内外に明らかにする．評価に際しては，教員の自己評価を取り入れる（教員は，学生による授業評価の結果を自らの評価に反映させる）．評価の対象として，例えば，優れた教科書や教材の作成についても積極的に位置付ける．FD に関する積極的な取組についても，適切と認める場合は評価の対象とする．さらに授業改善に向けた様々な努力や適切に評価する観点から，教員が教育業績の記録を整理・活用する仕組み（いわゆるティーチング・

ポートフォリオ）の導入・活用を積極的に検討する．教員の役割の機能分化（教育・研究・社会貢献など）に対応した教員評価の工夫について研究する．大学院修了者を教員として採用する際，審査に当たって，TA としての教育実績を適切に評価する．

ティーチング・ポートフォリオについてだけではなく，教員の役割の機能分化としてアカデミック・ポートフォリオで重要な要素である「教育・研究・社会貢献など」についても記載されている．

３．作成ワークショップ

2016 年度は本校では 2 回の TP・AP・スタッフ・ポートフォリオ（SP）作成 WS をおこなった．AP 作成 WS の概要を表 1 に，WS の主なスケジュールを表 2 に示す．

表 1　2016 年度に開催した AP 作成 WS の概要

回	日程	メンティー	メンター	スーパーバイザー
10	8 月 8 日～10 日	2 名（うち学外 1 名）	2 名（うち学外 1 名）	加藤由香里（名古屋外大）
11	12 月 26 日～28 日	2 名（うち学外 1 名）	2 名（うち学外 1 名）	山川修（福井県立大）

表 2　AP 作成 WS のおもなスケジュール

	1 日目	2 日目	3 日目
午前		個人ミーティング(2) AP 作成作業	個人ミーティング(4) AP 作成作業
午後	オリエンテーション AP シート作成 個人ミーティング(1) AP 作成作業	個人ミーティング(3) AP 作成作業	AP 作成作業 プレゼン準備 AP プレゼンテーション 修了式
夜間	夕食会 AP 作成作業	夕食会 AP 作成作業	

４．ＡＰ作成者の感想

江本純子　TP を H28 年 9 月に提出し，同年 12 月末の AP 作成ワークショップに参加した．参加目的は，3 つある．1 つは，TP 作成時，メンターに力づけられ，仲間と作成プロセスを共有しながら自分と向き合う作業がとても充実していたこと，2 つ目に，TP 作成直後の AP のため，AP の見通しがあり，かつ TP で更新すべき内容も最小限ですむこと，3 つ目は，普段の職場を離れての参加なので，所属機関の組織人としての様々な制約から解放されることであった．

実際のスケジュールは，2 週間前までの事前課題提出を経て，3 日間，個人ミーティングを受けつつ AP 作成，このうち 3 日目は，プレゼンテーションも行った．

TP 作成で大まかな流れを理解した上での参加であったが，苦労したこともあった．それは，TP 作成直後の AP 作成のため，TP 作成後の自分の生き方をさらに検討・再構築するのが困難であった．また職場を離れての参加は，気持の上で楽な半面，自分の状況をメンターや他の参加者に理解してもらえるかどうか，理解してもらえたとしても，受け入れてもらえるかどうか不安があった．というのも，教育面では，国家資格取得のための養成教育に携わっており，この特殊な事情を短時間で説明することも，理解していただくことも困難と思われた．

実際に参加してみて，とても安心できる環境の中で，AP 作成ができた．メンターにあたたかく見守られ，自分の生き方を見詰めることができたし，他の参加者にも受け止めてもらえた．また現在の教育実践についての疑問に新たな意味づけができた．これまで組織の中で要求されている教育に，抵抗感を持ってきたが，今の状況で何ができるのかを考え，出来ることを行ってゆこうと思う．

今後の目標は，以下 3 点を挙げておく．まず，TP，AP と随時更新すること，次に機会を見つけてメンターとして参加すること，最後に，TP，AP を 1 つのツールとして，社会活動に利用したい．

金成明美　TP があると知ってから，2 年後にこちらで TP を，さらに半年後には AP も書かせていただいた．

私の住む福島県浜通りは，体温以上に気温が上がることが無いため，AP 作成の思い出は暑さとの戦いもあったとまず記したい．

TP を作成して半年というインターバルで書いたことは，振り返りがしやすいと想像していたが，なぜ書きに来たのか？何を掴みたかったのか？どうして，こんなにも管理業務をおこなっているのか？自分自身の中に深く問いかけながらの作業は，苦しかった．

3 日目の午前中まで，自分の中の芯となるものは何だったのか，なぜこの大阪まで来て書いているのか，PDCA サイクルを自ら回せない介護福祉士は，要らない理由は何か，といった問いに対して答えを見いだせない私を，メンターの金田先生には辛抱強く待ってくれた．

その結果，目の前にいる学生という未来の介護福祉士を育てるだけでなく，自分も含めて「義の心を持った介護福祉士」であり続けるためには，生涯にわたって教育が必要である，と介護福祉士のキャリアパスを手書きで書き終えたときに，ようやく気付くことができ，深呼吸できたのだ．

TP，AP と書き終えた私は，次の目標として，地域に送

り出した介護福祉士や保育士達の，卒後教育の一環としてスタッフ・ポートフォリオを書く機会を与えられる短期大学としたい，と学長に申しあげた．あまりにも壮大な夢過ぎて，実現できるのか？と笑われたが，胸張って答える自分がいる．ポートフォリオは書いて満足，お宝にするものでは無く，自分自身の職業観を振り返り，さらに向上するために必要な点を見いだすためにある．地域で燃え尽きそうになりながら，福祉の現場で働く彼ら，彼女たちを支えるのは，互助，共助の力だけでは足りないのだ．自分自身の隠れた才能なりを発見して，伸ばしていく自助の力，そのことが介護福祉士や保育士に必要なのである．

このことに気付かせてくれたワークショップに，大変感謝している．

土井智晴　私は 2010 年 1 月に TP を初めて執筆した．そのテーマは，Project Based Learning 手法（以下，PBL）をベースにした実験実習方法であり，PBL 手法と私の教育スタイルを「府立高専魂を芽吹かせること」という理念からまとめたものであった．その TP は，2 回の更新作業を経て，2015 年 1 月に第 3 版として完成した．また，そのころから，大阪府立大学工業高等専門学校（以下，本校）の地域連携テクノセンター長という地域貢献を担う部署の長となった．それからおよそ 2 年が経過した 2017 年 1 月に AP を執筆する機会を得たので，地域貢献を中心として AP 作成を行った．

その結果，その AP の理念は「自己学習と他者貢献の環流」という理念にいたった．執筆時の原点は地域貢献がキーワードであったが，メンターと話をしていく中で，「自ら学ぶことを楽しむ」というもう一つのテーマがクローズアップされ，自分と他者との関係を見つめることで，自分が学ぶ楽しみ，他者が悦びを得ることを通して，また，自らが新しい知見を得るという，学びのスパイラルを見出した．教員は学生に知識を教える存在と捉えることができるが，そうすると，教員＝提供者，学生＝受容者となり一方通行の知の伝承になるのではないかと私は思った．よって，自ら学び楽しむ姿勢を学生に見せることで，学生も自らが関心の湧く学びを楽しみ，その学生が学び楽しむ笑顔を教員がみる機会を得て，教員も頑張るというスパイラルを期待している．この考え方は，先に執筆した TP の理念とも通じるところもあった．しかしながら，今回の AP 執筆のなかでは，私が教育する対象は学生も含み，地域貢献の対象である地元企業の経営者や技術者も包含するため他者貢献という言葉でまとめた．貢献する対象を他者と据えることで，地域貢献，本校および他校の学生への教育および国外交流を通して出会う外国人も包含することができた．

このように今回執筆した AP 作成作業を振り返る中で，メンターの存在が大きい．ひとりでは到達し得ないだろう行動の源泉に眼を向ける切っ掛けを与えてくれる存在である．もちろん，源泉はメンターも知らない場所にある．しかし，第 3 者として教育者の動きを客観的に据え，本人ひとりでは省みることができない源泉を気づかせることができる存在なのであろう．

今回の AP 作成作業を通して，TP/AP を作成するメンティーとそれを支援するメンターの経験は，改めて本校の TP/AP の取り組みが本校教職員の高次学習のよい機会となり，教育界の外部環境変化に対する本校の体力かつ強みになっていることを再確認した．

井上千鶴子　AP を書くつもりはなかった．TP は 2009 年 1 月に書いていた．その際，教科教育に限定して書かれた TP に違和感を覚えた．自分の教育業務は授業さえしていれば良いという物ではなく，むしろ教育の中の一部分が授業ではないかと考え始めていた頃だったせいかもしれない．結局自分の TP は担任業務なども取り込み，全体として学生に対する時の教育方針を書くといったまとめ方になった．当時はまだ AP を知らず，図らずも AP の三要素の内サービスをかなり取り込んだ TP になった．その後，2011 年に府立高専に AP が入ってきた．既にサービスの部分まで含めて TP に書いてしまっている私は，関心を持てなかった．その私が AP を書くことになったのは，校務の方も今までと違う業務が増え始め，TP よりももう少し大きなお皿が必要になってきたと思ったことがある．

以前から AP では「統合」とか「コア」とか呼ばれる，教育・サービス・研究の共通理念のような物を考えると聞いていた．だから，AP は書かなくとも，自分の共通理念は何だろうと考えることはしていた．それを使って今回の AP を作成したので，相変わらず理念の導出にはほとんど時間は使っていない．一番変わったのは，TP の部分である．AP の共通理念や，今後目標とすべきことから逆算的に TP を見直した時，内容自体は変わらないのだが，別の視点から再構成したいという気持ちになった．結局 TP の書き直しに，結構な時間を割いたが，これが一番の発見で成果だったと自分では思っている．

書き終えて，思うことが二つある．一つは，WS に参加してメンターに説明するうちに発想が生まれることがあり，やはり対話は必要なのだということ．もう一つは，TP でもそうだが，AP を作成できない人はないということである．よく三要素の内「〇〇はそれほどないので」という理由で AP 作成をためらう人があるが，その必要はないと思う．誰かに良く見せようと思って書くわけではなく，自分の仕事全体を見渡してみる目的であれば，アンバランスもそのまま書いておけばいいのではないかと思う．「自分が誇りに思う成果を書け」などは，言わんと

することは理解できるが，この言葉はアメリカ的だなあと思って横目で見ながら通り過ぎることにした．良いAPや悪いAPがあるのではなく，自分の仕事が整理され一つの視座が獲得できれば，良いAP作成だったのではないかと思う．私にとってAP作成は良かった．

５．メンターとしての心得

ここでは経験からAPWSにおけるメンター心得について整理してみたい．

AP作成におけるメンターとして大事なことは3点ある．1つ目は最初のメンタリングに臨むまでの準備である．スタートアップシートや直前のメンターミーティングにおける他のメンターやスーパーバイザーからの情報を上手くキャッチする．メンティーの不安を如何に和らげ，信頼関係を結ぶことができるか，最初のメンタリングにかかっている．TP同様，できるだけ必要な情報を集めることが求められる．

2つ目はメンティーが教育・研究・サービス活動を網羅でき，その中核となる原動力が何かを気付くことができるかである．APは，この原動力に相当するものに気づいて，自分がおこなっている教育・研究・サービス活動を俯瞰的に見つめ直すことができるかにかかっている．これを時間内に見つけることができるかが一番難しい点でもある．TPを作成された方であれば，「なぜ」「どうして」を繰り返し，一度深いところまで自分の教育理念を見つめ直すことができているので，方法論は理解されているはずである．原動力に相当するものに気づいてもらうために，特に重視しているのは，メンティーの方の歩みを最初にじっくりと拝聴することである．なぜ今日の教育や研究をおこなっているのか，大学入学から大学院修了，現在の職場まで，どのような道筋でおこなってきたかが，原動力に非常に関係していると感じている．中には幼い時や小学校の時の体験が今に繋がっている時もある．他人に自分自身のことを語ってもらうためには，先に述べた信頼関係を築くことが重要になってくる．またターニングポイントとして重要だと感じている論文や著書，学会発表などを伺っていくと，メンティーの歩んできた道筋が頭の中に描かれていくように感じる．メンティーも自分の歩んできた内容を人に話すことで，再確認できることが非常に大きいと感じている．

3つ目は，3日間のスケジュール管理である．AP作成をされる方は既にTPを書き上げているために，WSに参加されるまでに凝縮TPを書くことを義務付けている．したがって，WSでは研究やサービス活動について書き上げると同時に「統合」の章が一番重要になる．メンティーの作成進度の具合によっては，教育・研究・サービス活動を全体的に俯瞰できる図の作成や，自分の歩んできた道筋と成果などを先にまとめてもらうことをすすめている．何を書くか，何を書きたいかがわかってくると，時間内にどこまでおこなうかを自分で管理できる．誤字脱字や参考文献などはある程度チェックできれば，ほぼスケジュール内で書き上げることは可能となる．

６．おわりに

本稿では，2016年度に本校で実施したアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップについて報告した．メンティーはすでにTPを作成された方が対象であるが，記載した感想から，TP作成時とは異なり，別の視点から教育改善を見直したり，ポートフォリオが研究や社会活動までも含めた内容になっていることがわかる．メンターとしての心得は教員に必要不可欠な素養でもあり，メンター活動を通して，再確認していることにもなる．
大学や高専の教員として，全ての活動を振り返り，自分の仕事を整理する一つの手法として，参加される方あるいは興味を持たれている方の一助になれば幸いである．

謝辞

本研究はJSPS科研費17K01001の助成を受けたものです．またメンティーとして寄稿していただいた県立広島大学江本純子氏並びにいわき短期大学　金成明美氏のお二人に感謝の意を示します．

参考文献

[1] 北野ほか，日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して，大阪府立高専研究紀要，第43巻，pp.63-70(2009),
[2] ピーター・セルディン，J.エリザベス・ミラー著，大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳，アカデミック・ポートフォリオ，玉川大学出版部(2009).
[3]金田ほか，日本初単一教育機関内アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して，大阪府大高専研究紀要，第46巻，pp.71-76(2012),
[4]東田ほか，2012年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要,第47巻, pp.43-48(2013).
[5]東田ほか，2013年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要,第48巻, pp.37-42(2014).
[6]東田ほか，2014年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要,第49巻, pp.55-62(2015).